

第1章 企画展関連講演会の記録

■令和4年度 企画展2 関連講演会（第1回）

ここまでわかった！古津八幡山遺跡 －最新の調査成果を交えて－

相田泰臣（新潟市文化財センター学芸員）

目次

1. はじめに
2. 古津八幡山遺跡の概要
3. 最近の調査成果を交えて見た古津八幡山遺跡

1. はじめに

本日のお話ですが「ここまでわかった！古津八幡山遺跡」ということで、最近の調査成果を交えて、お話をさせていただきたいと思います。

（スライド1）話の流れですけれど、1番目に「はじめに」、2番目に「古津八幡山遺跡の概要」ということでお話をさせていただいたあと、3つ目に今日の本題であります「最近の調査成果を交えて見た古津八幡山遺跡」ということで、お話を進めさせていただこうと思っております。

（スライド2・3）まず「はじめに」ですが、1987年に磐越自動車道の土取り計画地にこの古津八幡山遺跡のある丘陵が選ばれ、その事前調査を行ったところ遺跡が発見されたということになります。今から35年前ですね。そして35年の中で、これまでに今年の調査を含めて25回の発掘調査を実施しております。平成17年に史跡に指定され、そのあと整備を行い、現在は歴史の広場として皆さんからご利用いただいているわけですが、実はまだ遺跡全体の3分の1くらいについて調査が終わったという段

階で、残りの3分の2については、まだよくわからないといった状況です。そのため、平成29年度から調査が不十分な場所について、再び発掘調査を行っているということでもあります。その結果、これまでに古津八幡山遺跡で最大となる大型の竪穴建物が発見されたり、昨年の調査では古津八幡山遺跡で最大の方形周溝墓、お墓が発見されるなどの成果がありました。そのお墓ですが、あとでまた詳しくお話をさせていただきますが、合計4つの埋葬施設を持つお墓であるということが、去年と今年の調査でわかりました。そういった大きな発見が平成29年度からの史跡の指定地外側の調査で見つかっているということになります。

（スライド4）まず古津八幡山遺跡が保存された経緯ですが、1987年に最初の調査が行われ、その後もどんどん重要な成果が上がっていました。これは1988年の現地説明会の様子ですけれど、324名と非常に多くの方が参加されたということです。重要な弥生時代の遺跡、あるいは大きな古墳があるということで、土取り場として選ばれたのですが、何とか遺跡を保存できないかということで、地元の新津青年会議所さんが主体となって保存運動が起こったと聞いております。日本考古学協会も保存に向けた動きを行っております。そして国や県、それと新津市の間でいろいろと協議を行った結果、1990年に遺跡の主要部分が保存さ

れることに決まりました。

(スライド5) さらに、新潟市の広域合併後の平成17年、2005年7月14日に、古津八幡山遺跡として国の史跡に指定されたという流れになります。平成17年に国史跡の指定を受けますが、古墳部分については少し遅れて2011年に追加の指定を受けています。

(スライド6) ちなみに、国指定の文化財は3種類に分けられておりまして、1つ目が貝塚や古墳、城跡などの遺跡ですね。2つ目が庭園や山岳などの名勝地。3つ目が動物や植物、地質鉱物などで、1つ目ですと史跡、2つ目ですと名勝、3つ目ですと天然記念物に区分されます。古津八幡山遺跡はこの1番目の史跡ということになります。国の史跡として登録されています。

(スライド7) 現在、新潟市内では国史跡が4つあります。古津八幡山遺跡のほかには、西蒲区の角田山麓にある前方後円墳の菖蒲塚古墳、それと今は新潟市の歴史博物館、みなとびあの敷地内にある旧新潟税関、そして平成30年に国の史跡になった新津油田金津鉱場跡の4つです。また県の史跡ですと、西区の的場遺跡と緒立遺跡の2つがあります。

(スライド8) 話は古津八幡山遺跡に戻りますが、平成17年に国史跡になったあと史跡の整備を行っています。これは遺跡の空撮写真ですが、これまでに丘陵の上に竪穴住居7棟や土塁、環濠や条溝と呼んでいる深い濠、溝、それと古墳時代の古津八幡山古墳などを復元整備しています。最初、弥生時代の竪穴住居や環濠などを復元整備し、ガイダンス施設である弥生の丘展示館が開館した平成24年に暫定供用を開始し、その後、古墳の復元整備が終了した平成27年から全面供用を行っています。

(スライド9) 赤い破線で囲っている所が国の史跡の指定範囲です。約12ヘクター

ルと、非常に大きな面積が指定になっておりますけれど、平成29年からはその北東部の指定地外の場所の調査を行っています。遺跡の中心は標高約50mの丘陵上ですが、そこから1段下がりをまして、標高約25mの丘陵中腹域の尾根において、そこまで遺構が広がっているのかどうかということを確認するために発掘調査を行ったわけです。平成29年から令和4年まで調査を行っており、平成29年から令和2年の調査では、古津八幡山遺跡で最大となる大型の竪穴建物が見つっています。また、令和3・4年の調査では、古津八幡山遺跡で最大となる方形周溝墓と呼ばれる弥生時代のお墓が見つかるなど、大変多くの成果が上がっています。

(スライド10) これは平成30年の新潟日報の記事ですけれど、最大級の大型竪穴住居が見つかったということで記事になりました。

(スライド11) また、令和3年の年末には県内最大級の方形周溝墓で、3人分の複数埋葬施設が見つかったということで新潟日報に取り上げられました。ちなみに今年、令和4年の調査で、実はもう1つ埋葬施設が見つかりまして、合計4人分の埋葬施設があったということがわかりました。東日本では、この時期1つのお墓に対して1人の埋設施設を持つのが一般的でして、古津八幡山遺跡は県内で初めて2人以上の複数埋葬が見つかった事例ということになりました。

1. 古津八幡山遺跡の概要

(スライド12) 次に、古津八幡山遺跡の概要ということで、これまでの調査や整備などについて概観していこうと思います。

(スライド13) 古津八幡山遺跡では縄文時代後期の集落も見つっていますが、主

体となるのはこの弥生時代です。弥生時代の後半の時期、弥生時代後期、それと終末期という時期に丘陵の上に集落がつくられています。紀元後から西暦 250 年くらいの間、弥生時代の集落がつくられています。そのあと丘陵の上から集落はなくなります。その後、古墳時代中期という時期、西暦 400 年くらいの時期になると、県内最大の古墳、古津八幡山古墳がつくられるといった流れになります。

そのあと、奈良時代、平安時代になると、この丘陵の周辺で鉄づくりも非常に盛んに行われており、蒲原郡の製鉄基地があったと考えられています。ちなみに、現在「金津」という地名がありますが、その金津という地名については古代の鉄づくりに由来すると考えられています。

(スライド 14) またあとで細かい説明を行います。古津八幡山遺跡は弥生時代の後期、それと終末期という時期、この青く塗ってある部分に集落がつくられているということになります。左側の数字は西暦です。紀元直後から弥生時代後期となっていますが、古津八幡山遺跡については西暦 50 年前後くらいからはじまり、丘陵の上に環濠が掘られたり、竪穴住居やお墓がつくられていたりしています。そして、弥生時代の終わりの時期、人によっては古墳時代の初めなどとも言ったりしますが、大体西暦 250 年くらいに集落は丘陵の上からいなくなるということがわかっています。

ちなみに、赤字で示している遺構が、平成 29 年からの調査で見つかった遺構になります。令和 2 年まで調査を行った大型竪穴建物など、丘陵中腹域の調査で見つかった遺構を赤字で示しています。大型竪穴建物 SI 1 は、古津八幡山遺跡の終わりくらいの時期の建物ですが、今年の調査では古津八幡山遺跡が出現した頃の竪穴住居も見つかっています。

また、令和 3 年の調査で見つかった大型の方形周溝墓については SZ743 と名称を付けていますが、令和 4 年の調査では、その大型方形周溝墓の近くでもう 1 つ方形周溝墓が新たに見つかりました。SZ822 と名称を付けています。最近の調査成果については、またあとで写真などととも詳しくお話しさせていただきます。

1) 弥生時代の概要

(スライド 15) 最初に弥生時代の高地性環濠集落ということを見ていきたいと思いません。

(スライド 16) 古津八幡山遺跡の位置ですが、阿賀野川と信濃川とが最も近接する場所に位置する遺跡です。あとで出土遺物などの特徴もお話させていただきますが、古津八幡山遺跡では北陸と会津方面の土器がかなりの割合で出ているので、日本海から阿賀野川を経由して内陸のほうに入っていく、もちろん逆のケースもありますが、日本海と内陸とをつなぐ交通の要衝に位置する遺跡であると考えられています。

(スライド 17) これは寺沢薫さんがつくられた高地性集落の分布図です。弥生時代中期後半から後期初めは瀬戸内海沿岸ですとか九州のほうで高地性集落が出現しているわけですが、弥生時代の後期後半から終わりくらいになるとその分布範囲に変化が認められ、北陸、新潟、越後平野のほうにも高地性集落が見られるようになります。その高地性集落の日本海側の北限域に古津八幡山遺跡は位置します。平成 17 年の史跡指定時には、日本海側最北の高地性環濠集落として指定を受けましたが、そのあと、日本海沿岸東北自動車道に伴う発掘調査で村上市の山元遺跡が見つかり、現在はそこが日本海側最北の高地性環濠集落になっています。また、村上市には滝ノ前遺跡という遺跡があり、そこは環濠を持たない高地性集落です。山元遺跡は、環濠を持つ高地

性環濠集落です。高い所にあり、濠を持つ集落の日本海側で一番北の遺跡は、現在山元遺跡ということになります。

ただし、山元遺跡は環濠をもつのですが浅く、幅もそれほど広くないので飛び越えられるような規模の濠です。お墓については、古津八幡山遺跡では方形周溝墓ですが、山元遺跡では土坑墓、穴を掘ってその中に亡くなった方を埋葬する土坑墓というお墓しか山元遺跡では見つかっていないというような違いがあります。山元遺跡は高地性環濠集落ではありますが、西日本や北陸の高地性環濠集落、古津八幡山遺跡などと比べ、やや形式的で、内容もやや異なると言えるかと思います。

(スライド 18) 古津八幡山遺跡についてはこれまで 25 回の発掘調査をしています。青く塗ってあるのが環濠と呼ばれる濠です。丘陵の頂部では幅 2 m、深さ 2 m の濠が途切れながらも存在し、その環濠に囲まれた内部を中心に、緑色で示してある堅穴住居が確認されています。これまでの調査で合計 66 棟の堅穴住居が見つかっています。

東側の濠の外側では方形周溝墓と呼ばれる四角くて周りに溝を持つお墓が 3 つ見つかっています。また、丘陵の一番高いところでは、前方後方形周溝墓と呼ばれるお墓も見つかっています。

この丸く塗られているところは時代が少し新しくなり、古墳時代の古津八幡山古墳になります。古墳の下や周辺からも弥生時代の堅穴住居が多く見つかっており、外環濠 A や D の際近くまで弥生時代の堅穴住居がつくられていたということがわかっています。

(スライド 19) これは条溝の写真です。環濠や条溝という名称が付いていますが、条溝についても環濠についても機能は同じで、どちらも幅が 2 m くらいで深さも 2 m くらいの断面 V 字形の濠です。環濠につい

ては、地形に沿った形で集落の周りを巡る濠を環濠と呼んでおり、条溝については尾根を直交方向に切る濠について条溝ということで、一応名称を付けていますが、形状や機能はどちらも同じということになります。

(スライド 20) これは環濠の写真です。作業員さんが中に入っていますが、この黒いところが環濠になります。環濠の一部だけを掘っているところです。幅が 2 m くらいで、深さも 2 m くらい、断面が V 字形の濠です。このように、中に入ると自力ではなかなか脱出できないような濠が集落の周りにあったということが発掘調査で確認されています。

(スライド 21) 環濠の断面をアップにした写真です。ポールと作業員さんが写っているのでその大きさが分かるかと思います。高い丘陵の上であり、環濠と呼ばれる濠を周りに巡らすということで、古津八幡山遺跡は防御的な集落であると考えられています。このような集落を高地性集落、あるいは高地性環濠集落と呼んでいるということになります。

先ほど高地性環濠集落の分布図が出てきましたけれど、弥生時代の後期という時期を前後して、遅いところでは弥生時代の終わりくらいまで続く集落が各地で出現します。防御性の高い集落といえ、文献に倭国で争いごとがあり、戦いをへて女王卑弥呼を共立し、争いごとが収まったといった記述があることから、この争いごとの影響を反映した集落だろうというのが有力な説かと思います。

(スライド 22) 現在はこのような形で濠の部分、あるいは濠の外側の土塁などを復元整備しています。

(スライド 23) 次に堅穴住居ですが、これまでに 66 棟見つかっています。古津八幡山遺跡の堅穴住居の基本的な構造ですが、

四角形で四隅が丸くなる平面形で、4本の柱で上屋を支えています。壁際には壁溝と呼ばれる排水や湿度調整のための溝が巡っており、一辺の壁際には貯蔵用の穴、貯蔵穴を1つ備えます。また、竪穴住居の中央付近では煮炊きを行った炉の跡が確認され、写真のように土が赤く焼けた状態で検出されます。これらが、古津八幡山遺跡で一般的な竪穴住居の構造になります。

(スライド 24) 現在、調査成果に基づいて7棟の竪穴住居を復元整備しています。

(スライド 25) これは方形周溝墓の写真です。方形周溝墓は丘陵の頂上付近で3つ見つかっています。

(スライド 26) 写真中央の穴は棺の痕跡で、その中から鉄剣や石鏃などが副葬品として出土しています。この鉄剣ですけれど、柄の部分にシカの角の痕跡が付着していることから鹿角装という、シカの角を加工した柄が付いていたということがわかっています。この鉄剣については、朝鮮半島製の可能性が高いと考えられています。なお、このようにシカの角を柄として使うのは、東日本の関東や中部地方の遺跡で多いという分布状況です。

(スライド 27) 今はこのように復元整備をしています。手前側の小さい方形周溝墓から、先ほど見た鉄剣や石鏃などが出ています。すぐ隣にも長方形の方形周溝墓がありますが、こちらについては削平により埋葬施設が残っていなかったというような状況です。

(スライド 28) 遺跡で一番標高の高いところでは、前方後方形の周溝墓が見つかっています。この前方後方形周溝墓が、古津八幡山遺跡における弥生時代のお墓としては一番新しいと考えられています。それまで四角い形のお墓であったのが、四角にさらに通路状の長方形の部分がついた前方後方形という新しい形式のお墓が出現しま

す。弥生時代の終わりくらいの時期であろうと推測されていますが、古墳時代の前方後方墳という、同じような形の古墳につながるようなお墓が、県内ではいち早く古津八幡山遺跡でつくられているという状況がうかがえます。

(スライド 29) 現在はこのように復元しています。

(スライド 30) 古津八幡山遺跡出土の土器を見ると、左側に分布範囲がありますが、まず北陸系の土器、今の石川県や富山県などと同じような北陸系の土器が出土しています。それから東北系の土器、福島県などと非常によく似た土器が出ています。比率は北陸系が40%で東北系が35%と同じような割合で出ています。さらにその北陸系の土器と東北系の土器を合わせたような土器、形は東北系ですが、文様、調整の仕方などは北陸の要素があるといった折衷の土器、ここでは地元系土器としておりますが、そういった土器が20%の割合で出土しています。そのように、3系統の土器が同じような割合で出土しているというのは、古津八幡山遺跡の非常に大きな特徴であると言えます。阿賀野川を介して日本海と内陸、会津方面とを結ぶ交通の要衝に位置する古津八幡山遺跡の環境や当時の地域間関係をよく示しているかと思えます。

また、割合は少ないですが長野系の土器も古津八幡山遺跡に入ってきています。信濃川や山間部のルートを通して入ってきた状況が推測されます。

2) 古墳時代の概要

(スライド 31) 次に古津八幡山古墳について少し説明します。

(スライド 32) 古墳時代になると丘陵の一番北の端に古津八幡山古墳がつくられます。

(スライド 33) これまでの発掘調査で直径60mの大型の円墳であることがわかっ

ています。古墳の調査を行った経緯ですが、丘陵一帯は第二次世界大戦前後の時期に畑として利用されていて、その畑の土地を確保するために古墳の斜面部分を段切りするということが行われていました。そのため、古墳の形や規模が確定できない状況でした。史跡指定されたあと古墳を復元整備しようということで、古墳の形や大きさを確定させるため、平成 23 年から 25 年の 3 年をかけて発掘調査を行いました。

(スライド 34) その発掘調査成果を基に復元整備しました。これが整備後の写真です。斜面があって、途中平らな部分があって、また斜面があって墳頂の平らな部分があるということで、2 段になっている古墳です。丘陵の端につくられているため、古墳の上からは越後平野を一望でき、佐渡島も確認することができます。

(スライド 35) これは新潟や東北の古墳の分布図です。古津八幡山古墳はこの場所になります。南は九州から北は東北まで古墳が分布していますが、日本海側の古津八幡山古墳よりも北の古墳となると、古津八幡山古墳から北東約 40 km、胎内市に城の山古墳があります。これも円墳ですね。それと、庄内平野に鷲畑山 2 号墳という、1 辺が 20m ほどの四角い古墳ではないかと言われているものがある程度でして、日本海側における古墳の分布域としては新潟平野が北限域となっています。先ほど、弥生時代の高地性環濠集落について村上市の山元遺跡が北限ということでお話いたしました。古墳時代の古墳の分布についても似たような状況で、新潟平野が北限域となっています。

ちなみに、新潟市の国史跡である菖蒲塚古墳は前方後円形の古墳で、古墳時代で一番有力なお墓の形である前方後円墳の分布の日本海側における北限に位置づけられます。このように、新潟平野は弥生時代の高

地性集落や古墳文化の北限域になっている状況がうかがえるかと思います。

(スライド 36) 写真は古津八幡山遺跡を空撮した写真です。古墳は尾根の一番北側につくられていて、平野を見下ろせる場所に位置しています。ちなみに、平野にあるこの建物を建てる際、古津八幡山古墳と同じくらいの時期の集落が見つかっています。舟戸遺跡という遺跡で、古津八幡山古墳の被葬者の生前の集落である可能性も指摘されています。

(スライド 37) これは周辺の遺跡分布を示したもので、古津八幡山古墳はこの場所です。北側に古墳時代の遺跡が点々とあります。舟戸遺跡はここです。ここから古津八幡山古墳と同じくらいの時期の遺物が出ています。森田遺跡からは古墳時代前期の壺の口の部分が出土しています。最近調査をしている場所はこの辺りです。弥生時代の終わりくらいの時期の大型堅穴建物などが見つかった尾根になりますが、その後、古墳時代になると例えば森田遺跡辺りに下りていった可能性があるのかなというふうに考えています。

(スライド 38) 舟戸遺跡は社屋の建設に伴い狭い面積ですが発掘調査が行われています。この色が塗られている部分が堅穴住居です。そして、この長方形の部分が掘立柱建物です。それと杭列、柵が見つかっていて、一般集落ではないだろうと考えられています。

(スライド 39) これが杭列の写真です。等間隔で木の杭が見つかっています。

(スライド 40) これは堅穴住居の写真です。一辺 7.5m と古墳時代の大型の堅穴住居が見つかっています。黒い部分は炭です。県内においてカマドを使う堅穴住居としては一番古い可能性がある建物です。

3) 奈良・平安時代の概要

(スライド 41) 奈良・平安時代になると

大規模な製鉄、鉄づくりが行われます。

(スライド 42) 左上は新潟県埋蔵文化財センター近くの大入遺跡の写真です。竪型炉と踏みフイゴの遺構が見つっています。右側にイラストがありますが、踏みフイゴは人が両側に乗ってシーソーのように踏むことで竪型炉の中に空気を送り込むものです。このように、砂鉄から鉄をつくるための遺構がいくつも見つっています。

この製鉄関連の遺構については現地でも復元などの整備をしておりますが、地元の金津の地名の由来と言われており、関係者からは製鉄についても学習できるような整備を今後してほしい、といった声も頂いており、今後の検討課題となっております。

以上、古津八幡山遺跡の概要についてお話をさせていただきました。このあと、本題であります「最近の調査成果を交えて見た古津八幡山遺跡」ということで、お話をさせていただきます。

2. 最近の調査成果を交えて見た古津八幡山遺跡

(スライド 43) ここからは近年の調査成果をお話しながら、弥生時代の古津八幡山遺跡について見ていきたいと思います。

(スライド 44) 繰り返しになりますけれど、平成 29 年から遺跡北東側の史跡指定地外の場所について調査を行っています。

1) 平成 29～令和 2 年度の調査成果 大型竪穴建物とその構造

(スライド 45) 平成 29 年から令和 2 年度にかけての調査では、大型の竪穴建物や掘立柱建物などが見つかりました。左側はその平面図で、右側は大型竪穴建物と掘立柱建物の場所を拡大した図です。

(スライド 46・47) 大型竪穴建物は一辺が 9.5m です。それに隣接して、一部は重なるのですが、一辺約 4 m の隅丸方形の竪穴

住居が見つっています。竪穴住居の方が新しく、大型竪穴建物を壊して竪穴住居をつくっていました。

この大型竪穴建物は一度建て替えを行っていることがわかっています。この黄色い破線で示したラインが建物の最初の壁の部分になります。そして、青い破線で示していますが、そのあとに拡張するように 1 度建て替えていることが分かっています。ただし、上屋を支える柱は 6 本で、建て替え前も建て替え後も同じ柱を利用している可能性が推測されます。そして繰り返しになりますが、大型竪穴建物を壊して約 4 m の竪穴住居がつけられるという変遷が分かっています。

(スライド 48) 大型竪穴建物の変遷についてももう一度細かく見ていきます。最初に、この黄色い破線部分で竪穴建物がつけられています。6 本柱の構造と推測されます。そして、建物の中央付近には穴が掘られていて、そこから排水用の溝が建物の外側へ延びていく構造であったと考えられます。なお、通常竪穴住居で確認される煮炊きをした炉の跡や、貯蔵穴が認められないことなども合わせて、ほかの竪穴住居とは異なる用途で建てられた、性格が異なる建物と推測されます。

また建物内中央から建物外へと延びる排水用の溝ですが、古津八幡山遺跡のほかの竪穴住居ではこういった排水溝は確認されおらず、6 本の支柱穴と同様に、この大型竪穴建物がほかの竪穴住居とは異なる内部構造であるということが言えるかと思えます。

(スライド 49) 建て替え後、建物を拡張しているのですが、柱は前と同じ柱を再利用していると考えています。そして、中央付近の土坑から外に延びていた排水溝は、壁際の溝から外へ延びる構造に変わっています。

(スライド 50) その大型竪穴建物の出土遺物です。弥生時代の終わり頃の時期、古津八幡山遺跡の最後のほうの時期の建物であるということが出土遺物から分かります。丘陵の上の環濠が埋まったあとにつくられた建物ということになります。

この大型竪穴建物では鉄製品のヤリガンナが1点出ています。砥石なども出ていますので、鉄製品を研いだりしていることがうかがえます。それと弥生土器ですが、弥生時代の終わりくらいになると東北系の土器が非常に少なくなっており、基本的に北陸系と呼んでいる土器に限られるというような変化も確認できます。

(スライド 51) そして、その大型竪穴建物を壊して隣に竪穴住居がつくられています。この竪穴住居については、4本柱で、貯蔵穴もあり、煮炊きをした炉の跡も確認できているので、居住用として使われたと推測されます。ただし、この竪穴住居にも壁際の溝から外へ延びる排水用の溝が確認できており、通常古津八幡山遺跡の竪穴住居とは少し違った構造の住居であると推測しています。

(スライド 52) これは古津八幡山遺跡の竪穴住居の大きさをプロットした図になります。古津八幡山遺跡では、大体5mくらいの竪穴住居が一般的な大きさですが、大型竪穴建物は一辺が9.5mということで、ほかの建物とは隔絶した大きさの建物であることが分かります。煮炊きをする炉がなく、また貯蔵穴もないということで、居住用ではなくて特別な用途で利用されたことが推測されます。

北陸の大型建物

(スライド 53) 5本以上の柱で上屋を支える多柱構造や、排水用の溝を持つ事例というのが、古津八幡山遺跡の他の建物では確認できないのですが、北陸地方の大規模な拠点集落の中に、大型の建物で多柱構造

をとり、中央付近の土坑や壁際の溝から建物外へと排水溝が延びる建物が散見されています。恐らく、そういった北陸地方の拠点集落の首長とのネットワークの中で、古津八幡山遺跡の大型竪穴建物がつくられた可能性が考えられます。左は石川県小松市の遺跡で、右は富山県高岡市の遺跡です。どちらも地域の拠点的な集落で、そういった建物をもつ遺跡が面的に広がるのではなく点と点で、有力な首長同士の間で出現してくるのであろうと推測をしております。

2) 令和3・4年度の調査成果

(スライド 54) 次に令和3・4年度の調査成果について見ていきます。これまで見てきた大型竪穴建物はここですね。そこから尾根に沿ってさらに150mくらい北へ進んだ場所を令和3年から調査をしています。この黒く塗られている部分が現在登録されている古津八幡山遺跡の範囲なのですが、令和3年度にその遺跡範囲のさらに外側を調査したところ、方形周溝墓と呼ばれるお墓や竪穴住居などが新たに見つかりました。

(スライド 55) これは令和3・4年度に調査した場所の平面図です。標高が23mくらいの緩斜面域、あるいは平坦面域に位置します。四角い部分が調査を行った範囲です。全体を面的に調査しているわけではなく、調査区を設定し、その部分を調査して遺構があるかどうかを確認するという調査を行っています。そうしたところ、緑色の部分が竪穴住居ですが、竪穴住居が3棟見つかりました。それと、去年の調査で方形周溝墓というお墓が丘陵の中腹域で初めて見つかりましたが、さらに今年の調査で、その北側にもう1つ方形周溝墓が見つかりました。

令和3・4年度に確認された竪穴住居

(スライド 56) それでは写真で見てみたいと思います。これは令和3年度に見つ

かった竪穴住居 SI728 の写真になります。一辺が約 5 m の隅丸方形の建物と推定しています。一部しか掘っていませんが、柱が 2 本見つかり、4 本柱の建物と推定しています。この建物からは鉄鏝なども出土しています。出土遺物から、弥生時代の後期後半という時期の竪穴住居と推測されます。丘陵の上で環濠に囲まれた集落が繁栄している時期の竪穴住居が見つかりました。この竪穴住居は 1 回建て替えて行っていて、最初は少し小さい大きさであったのを、少し外側に広げて建て替えています。

(スライド 57) 令和 4 年の調査でも竪穴住居が 2 棟見つかりました。これは竪穴住居 SI802 の写真です。これも一部しか掘っていませんが、写真のもっと左側まで住居の範囲は広がります。建物の外側には、雨水などを排水するための周溝を持っています。これも出土土器から弥生時代の後期後半と推測されます。直径が約 5.5m ほどの丸い形状の建物になるのではないかと推定しています。

(スライド 58) もう 1 棟、北側で建物が見つかりました。これについては、竪穴部分が削平により確認できないのですが、周りの周溝と柱穴が確認できました。一辺約 6 m の隅丸方形の竪穴住居と推定しています。柱穴が 3 つ見つかり、こちらでも 4 本柱で上屋を支える構造の竪穴住居であろうと推定しています。写真の手前側が東側になりますが、周溝の東側についても削平により途切れて確認できないといった状況でした。一辺約 6 m と古津八幡山遺跡の中では、比較的大型の建物と推定しています。この建物も、出土遺物から弥生時代の後期後半、頂上部の環濠がまだ機能している時期の建物と推測されます。

丘陵中腹域の竪穴住居

(スライド 59) この丘陵中腹域において、上の環濠が機能している時期の竪穴住居が

いくつか見つかったということでお話をさせていただきました。大型の竪穴建物は、環濠が機能しなくなったあと、弥生時代の終わり頃、古津八幡山遺跡の最後の段階の建物です。丘陵の南東部分にも緑色に塗られた場所がいくつかありますが、これも弥生時代の終わりくらいの時期の建物です。ですので、これまでは上の環濠が機能しなくなったあと、竪穴住居が環濠の外側に広がっていくのだろうと考えていたのですが、令和 3・4 年度の調査では、上の環濠が機能している段階の竪穴住居が 3 棟見つかりました。これによって、頂上部分の環濠がまだ機能していて、頂上部分が集落の中心であった時期に、遺跡北東部の中腹域でも住居が形成されていたということが明らかになってきました。そのため、頂上部と中腹域でどのような空間利用のされ方に違いがあったのか、あるいは、頂上部につくる建物と中腹域につくる建物とで、どういった違いがあるのかなど、少しわからなくなってきたといえますか、今後の課題であろうと考えております。

令和 3・4 年度に確認された方形周溝墓

(スライド 60) 次にお墓の話をしていただきます。令和 3 年度の調査で、大型の方形周溝墓、SZ743 が丘陵中腹域で新たに発見されました。そして今年、令和 4 年度の調査で、SZ743 の北側においても一つ方形周溝墓、SZ822 が発見されました。お墓の時期ですが、大型の方形周溝墓については、出土遺物から弥生時代の後期後半から末の時期のお墓と考えています。また、北側の方形周溝墓については、土器が出土していないため細かい時期がわからないといった状況です。ただし、先ほど説明をした竪穴住居 SI821 の周溝を壊して方形周溝墓 SZ822 の周溝がつくられており、竪穴住居 SI821 が弥生時代の後期後半と推測されるので、方形周溝墓 SZ822 はそれよりも新し

いということまでは言えます。

(スライド 61) これは令和 3 年度の調査で見つかった大型の方形周溝墓の平面図です。上が北の方角になります。令和 3 年度の調査では東側の周溝がはっきりしませんが、令和 4 年の調査で東側の周溝が確認され、それによりこの方形周溝墓の形や規模を確定することができました。この方形周溝墓は周溝の四隅が途切れる形態で、周溝の内側で計測すると、南北方向で 9.6 m、東西方向で 8.4m の大きさです。また、令和 3 年度の調査では埋葬部 1 と埋葬部 2、埋葬部 3 が見つかっていましたが、令和 4 年の調査で埋葬部 2 に隣接してこの埋葬部 4 が新たに見つかり、1 つのお墓の内部に合計 4 つの埋葬施設を持つということが判明しました。

(スライド 62) これが大型の方形周溝墓の写真です。4 辺に周溝を持っていて、その内部に埋葬施設が 4 基つくられているお墓であるということが確認できました。

(スライド 63) これは少し角度が違う所からの写真です。埋葬部が 4 基あるお墓ということで、そういった弥生時代の複数埋葬というのは新潟県で初の事例で、東日本でも非常に珍しいかと思います。複数埋葬を行うお墓というのは、西日本に分布が多い状況です。

(スライド 64) これは方形周溝墓から出土した資料になります。保存目的の調査ということで、基本的にはあまり掘らずに、遺構の把握を最優先にした調査を行っています。といいますのも、将来研究がさらに進展した段階に再検証できるように、あるいは新たな技術でより精度の高い発掘手法で将来発掘できるように、ということでそのような調査を行っています。そのため、出土遺物はそれほど多くはないのですが、一部掘った中からこういった資料が出土しています。土器では壺や甕、これらについ

ては周溝から出土しています。また、中心となる埋葬部 1 からは高杯の脚部、それと完形のガラス玉が 1 点出ています。下のガラス玉は、周溝から少し欠損をした状態で出ています。埋葬部 1 からは、他に石鏃が 2 点出土しています。左側は完形、右側は欠けた状態の石鏃です。

(スライド 65) これは東側から見た 4 つの埋葬施設の写真です。合計 4 つの埋葬施設がありますが、その中で中心となる埋葬施設はこの埋葬部 1 と考えています。白い破線で示しているのが、埋葬するために掘った穴の範囲です。墓壙（ぼこう）などと呼んだりしますけれど、その外側のラインです。通常、墓壙を掘ってその中に棺を入れて埋めるということになるのですが、埋葬部 1 では、大きい墓坑を掘ったあとに、黄色い破線で示している板材で囲い、さらにその板材で囲った空間の中に木棺を入れておけると考えられるのです。こういった施設を木槨、木槨構造などというのですが、木槨という木で部屋をつくって、その中に棺を入れるというような埋葬形態であるということが、今年の調査で分かったわけです。

(スライド 66) これは埋葬部 1 の写真です。最初広く墓壙を掘って、その中に板材を四方に立てて空間をつくり、その空間の中に木の棺を置く、という構造であったと考えられます。ちなみに木棺部分については、幅が 0.8m、長さが 1.9m ほどと推測されます。木槨部分については、外寸で幅が 1.2m、長さが 3 m を測ります。

(スライド 67) 下のイラストは木槨のイメージのイラストです。板で囲った空間の中に、さらに木の棺を入れる構造です。木の棺と板材との間が空間になる構造ですね。埋葬部 1 もこのような木槨の構造だったと考えています。

写真は埋葬部 1 の中央部分の断面写真で

す。木槨と考える板材がこの黄色いラインです。その板材の下部には、オレンジ色の破線で示しましたが、平らな土が置かれていました。そして板材の外側、墓壙との間は硬い粘土っぽい土で固められていました。まず墓壙を広く掘ったあとにその中に板材を立てて、その間を硬い土で固めて板材が倒れないようにし、さらにその板材の内側下部には水平に土を敷いて整地をする。そして、赤色で示していますが、その中に棺を置いたと考えています。そのあと、棺の蓋をし、さらに木槨の蓋をして、その上を土で覆って完成する順番が復元できます。その後、木槨や木槨の板材が腐って上から土が内部へと流入し、さらに後世に墓の上部が削平を受けて、黒い点線部分より下しか昔の土が残っていないといった現在の堆積状況になったことが、土の観察から推測できるわけです。

(スライド 68) なお、ほかの埋葬部 2、3、4については、木槨構造ではなく木棺を直接埋めた埋葬施設であるということも分かりました。右下は埋葬部 2 の断面の写真ですが、墓壙を広く掘ったあとに木棺を中に入れていたことがわかります。幅が約 0.6m の木棺を入れていて、その外側、墓壙との間を土で埋めています。木棺の模式図が右上にあります。埋葬部 2、3、4 はこのように木棺を墓壙に直接埋める埋葬形態でした。木棺直葬（じきそう）と呼んだりします。

(スライド 69) これは令和 3 年度の調査が終わった段階の復元イメージのイラストです。その段階では 3 つの埋葬施設が見つかったわけですが、令和 4 年度に新たにもう 1 つ埋葬施設が見つかったの、これからまたもう 1 つ、このイラストに埋葬施設を追加しないとイケません。また、東側の周溝もはっきりしていませんでしたが、令和 4 年の調査で見つかったの、東側の

周溝についても新たに書き加えないといけません。さらに、中心となる埋葬部 1 については木棺ということでイラストを描いていましたが、これも調査で木槨墓であると考えられますので、イラストを修正しないとイケないといった状況です。

(スライド 70) 令和 4 年度の調査で、これまで見てきた大型の方形周溝墓のさらに北側で、新たにもう 1 つ方形周溝墓が見つかりました。こちらについては、一辺が約 5 m とやや小型の方形周溝墓です。先ほどの大型の方形周溝墓と違い、周溝が隅で途切れない形態です。このように、周りを掘るとこのようなお墓が点々と見つかることが推測されるわけですが、令和 3・4 年の調査によって、この場所が墓域として利用されていたということがわかってきました。

令和 3・4 年度調査成果のまとめ

(スライド 71) 以上、令和 3・4 年の調査をまとめますと、竪穴住居が 3 つ見つかっていて、その 3 つとも弥生時代の後期後半という時期、まだ丘陵上の環濠が埋まっておらず、その中で集落が繁栄していた時期の建物が中腹域でも見つかったということになります。そして、方形周溝墓については、その竪穴住居のあと、上の環濠が埋没し始める時期、あるいは埋没したあとのお墓と考えています。ですので、最初は居住域として利用されていて、そのあとに墓域として利用されるようになったという変遷が追えるかと思えます。

ちなみにこの部分、10T 1 の調査区を拡大したのが左側にありますけれど、2 つの柱穴がここで見つかっています。柱を抜いたあとに、弥生土器を意図的に中に入れていたと考えられます。一部しか調査をしていないので、柱穴の広がり分かりませんが、おそらく掘立柱建物があったであろうと考えております。これについては、土器を柱の穴の中に埋め込んでいるので、儀礼

的な建物の可能性も考えられるかと思いません。方形周溝墓と近接しているので、お墓の儀礼などに関わるような建物かもしれません。

古津八幡山遺跡における墓の変遷

(スライド 72) 古津八幡山遺跡のお墓の変遷をまとめた図です。これについては縮尺が同じですので、大きさの違いがわかるかと思えます。最初に鹿角装鉄剣が出たお墓で、SX1005 ですね。右側に書いてある数字はお墓の大きさで、3 m くらいの方角周溝墓が、古津八幡山遺跡の弥生時代の後期に最初につくられたと考えられます。そのあと、SX1005 に隣接して方形周溝墓、SX1004 がつくられたと考えられます。そのあとのお墓がよくわからなかったのですが、昨年の調査で見つかった大型の方角周溝墓の SZ743 がそのあとにつくられたお墓であろうと、出土遺物から推測されます。さらに今年の調査で見つかった方形周溝墓 SZ822、時期は今のところはっきりとしませんが、竪穴住居の SI821 の周溝を壊してつくられているのでそれよりも新しい時期といえ、場合によっては大型の方角周溝墓のあとにつくられた可能性があるのかなと考えています。

頂上部分の前方後方形の周溝墓については、古津八幡山遺跡の最後の時期、弥生時代の終わりの時期で、そのすぐあとに古墳時代になるといった変遷を想定しています。昨年見つかった大型の方角周溝墓ですが、やはりそれまでの方角周溝墓に比べて、サイズの非常に大きな方角周溝墓が丘陵の中腹域につくられるようになったということが分かるかと思えます。

(スライド 73) これが鹿角装鉄剣が出た、丘陵の上につくられた方形周溝墓 SX1005 です。大きさは溝の内側で 2.8m×3.1m くらいです。昨年見つかった方形周溝墓 SZ743 は、一辺がその約 3 倍の長さで、面積

では 9 倍ほどの大きさということになります。

(スライド 74) 棺の大きさについては、棺の幅が約 0.5m で、長さが約 1.6m、その中から鉄剣や石鏃が出たわけですが、去年の調査で見つかった大型の方角周溝墓 SZ743 の中心埋葬施設である埋葬部 1 については、木棺の痕跡から幅が 0.8m、長さ 1.9m というので、棺の大きさも大型化してると考えられます。ほかの埋葬部 2、3、4 についても、木棺の幅は 0.6m くらいで長さが 1.8 から 2 m くらいと推定され、やや大型化していると考えられます。

木槨構造の埋葬施設

(スライド 75) 奈良県の橿原考古学研究所の副所長をされている岡林孝作さんが木槨についてご研究をされており、これは岡林さんがつくられたものに古津八幡山遺跡を追加した国内の木槨墓の一覧になります。岡林さんには令和 4 年の発掘調査中に古津八幡山遺跡の現場を見ていただき、いろいろとご指導をいただきました。現在、日本国内の木槨墓、確実な例が大体 30 例ぐらいあるということです。岡林さんの分類で A 類、B 類、C 類というふうに分けられていて、分類ごとに色分けをしたのですが、このオレンジ色の部分が A 類、紫色の部分が B 類、薄ピンク色の部分が C 類となります。A 類から B 類、B 類から C 類というように、時期や時代を追って木槨墓の分類の主体が移っていくということになりますが、古津八幡山遺跡についてはその中の B 類になります。この赤く囲った部分が古津八幡山遺跡の埋葬部 1 です。

この B 類というのは、弥生時代の後期という時期と終末期という時期に認められています。木槨墓が現在国内で 30 例程度見ついているということですが、いずれも各地の有力な墳丘墓の中心的な埋葬施設にこの木槨形式が採用されているということで、

弥生の丘展示館 企画展関連講演会 2022.11.20 新津美術館市民ギャラリー

ここまでわかった！古津八幡山遺跡 —最新の調査成果を交えて—

新潟市歴史文化課 文化財センター 相田泰臣



1. はじめに
2. 古津八幡山遺跡の概要
3. 最近の調査成果を交えて見た古津八幡山遺跡

古津八幡山遺跡遠景(北東から)

スライド1

1. はじめに

スライド2

これまでの発掘調査

- ・遺跡が最初に発見された1987(昭和62年)の第1次発掘調査から、これまで25回の発掘調査を実施。

平成29年度から調査が不十分な場所について再び発掘調査を行っている。

⇒古津八幡山遺跡で最大の大型竪穴建物発見
⇒古津八幡山遺跡で最大の方形周溝墓発見

スライド3

古津八幡山遺跡の保存

⇒ 地元をはじめ、全国的な保存運動がおこる




講演会(甘粕健氏・坂井秀弥氏 1988年) 発掘調査現地説明会(1988年)

- ・1990(平成2)年、遺跡の主要部分が保存されることに決まる。

スライド4

史跡の指定

- ・2005(平成17)年7月14日
「古津八幡山遺跡」として国の史跡に指定
- ・2011(平成23)年2月7日
古墳部分が追加指定される

スライド5

以下の文化財の総称を記念物と呼ぶ。

1. 貝塚・古墳・都城跡・城跡旧宅などの遺跡で我が国にとって歴史上または学術上価値の高いもの
2. 庭園・橋梁・峡谷・海浜・山岳などの名勝地で我が国にとって芸術上または鑑賞上価値の高いもの
3. 動物・植物及び地質鉱物で我が国にとって学術上価値の高いもの

国はこれら記念物のうち、重要なものをその種類に従って「史跡」・「名勝」・「天然記念物」に指定し、保護を図っている。





菰蒲塚古墳 旧新潟税関 新津油田金津鉾場跡

史跡とは

スライド6

新潟市内の史跡

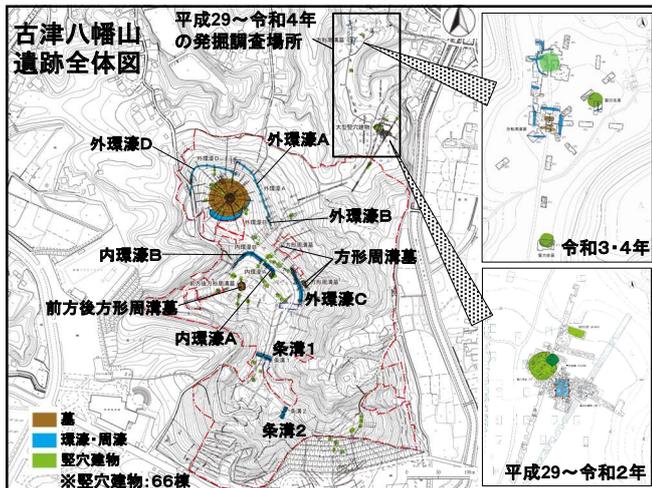
- 西蒲区 菖蒲塚古墳（昭和5年 国指定）
日本海側最北の前方後円墳
- 中央区 旧新潟税関（昭和44年 国指定）
幕末～明治初期の開港五港の中で唯一現存する開港当時の運上所（税関）
- 秋葉区 古津八幡山遺跡（平成17年 国指定）
日本海側最北域の高地性環濠集落。古墳時代には県内最大の古津八幡山古墳が造られる。
- 秋葉区 新津油田金津鉞場跡（平成30年 国指定）
 - 西区 的場遺跡（県指定）
 - 西区 緒立遺跡（県指定）

スライド7



古津八幡山遺跡遠景(北東から)

スライド8



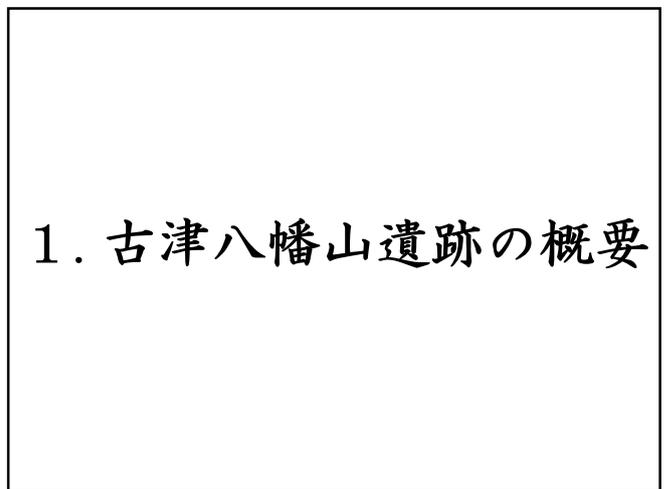
スライド9



スライド10



スライド11



スライド12

時代	特徴
旧石器時代	市内の最古の石器が残される
縄文時代	草創期 早期 前期 中期 後期 晩期
弥生時代	前期 中期 後期 終末期
古墳時代	前期 中期 後期
飛鳥時代	
奈良時代	
平安時代	
鎌倉時代	

古津八幡山遺跡年表

【H29～R4年の調査】

竪穴建物5棟
 方形周溝墓2基
 大型竪穴建物1棟

スライド13

時代	北陸西部編年	古墳集成編年	新潟シンボジウム編年	古津八幡山遺跡
弥生時代前期	小松 専光寺 戸永日			環濠 — — —
弥生時代後期	V-1群		1期	集落の出現 外環濠の掘削
	V-2群	環濠式	2期	
弥生時代終末	2-1群	法仏式	3期	環濠が上層まで埋没 ⇒一部再掘削? 内環濠掘削?
	3群	月影式	4期	大型竪穴建物(S11) 竪穴住居(S1465)
古墳時代前期	4群	白江式	5期	高地性集落の廃絶、平地での集落の出現
	5群		6期	前方後方形周溝墓(SX03514)?
古墳時代中期	6群		7期	I 古津八幡山古墳(古墳中期)
	7群	日野ケルビ式	8期	
	8群		9期	
	9群	高島式	10期	

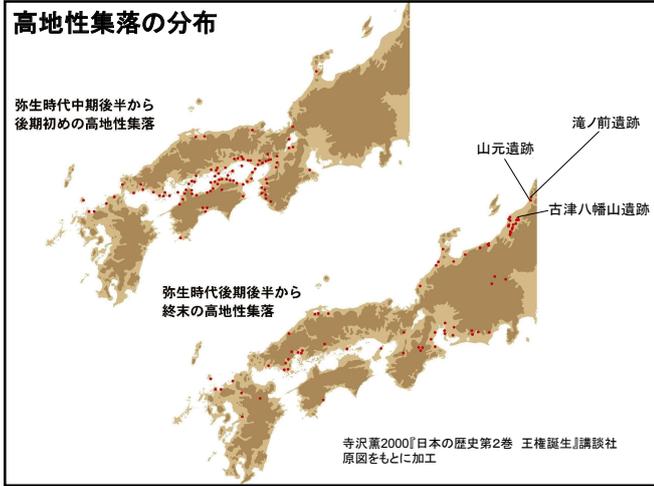
スライド14

① 弥生時代
 高地性環濠集落

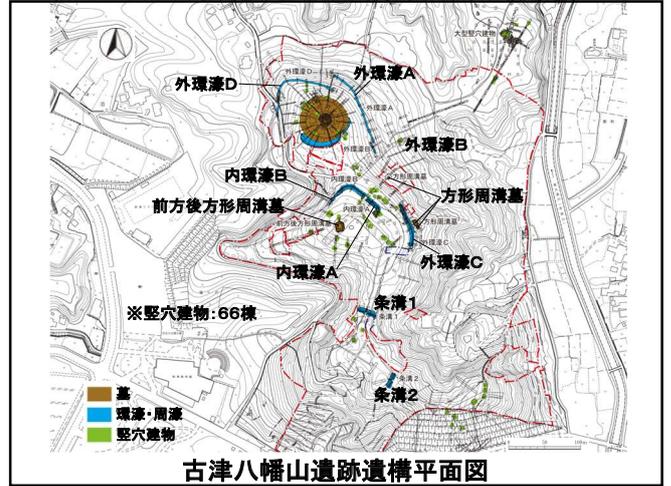
スライド15



スライド16



スライド17



スライド18



条溝

スライド19



環濠

スライド20



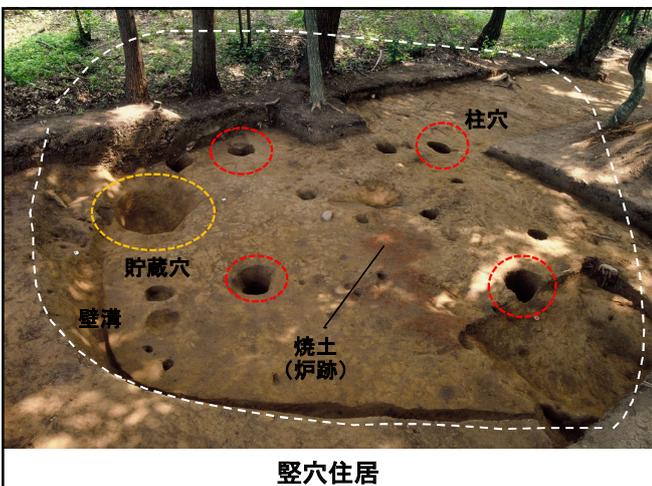
環濠

スライド21



環濠(復元整備後)

スライド22



竪穴住居

スライド23



竪穴住居(復元整備後)

スライド24



方形周溝墓

スライド25



方形周溝墓埋葬部

スライド26

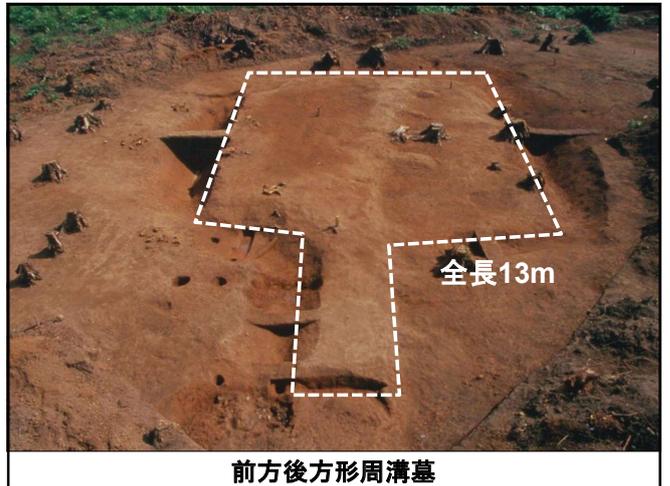


4.7m × 6.3m

2.8m × 3.1m

方形周溝墓(復元整備後)

スライド27



前方後方形周溝墓

スライド28



前方後方形周溝墓(復元整備後)

スライド29

古津八幡山遺跡出土土器の系統別イメージ

土器の特徴		
東北系	天王山式	縄文とヘラで描いた文様
北陸系	摺槽式・法仏式	薄板で土器の表面をなでる(ハケ目)
地元系	八幡山式	東北的な器形に北陸的なハケ目による整形手法
その他外来系	長野系(箱溝式)	櫛描文・赤い土器

北陸系土器

東北系土器

地元系土器(折衷土器)

古津八幡山遺跡出土土器

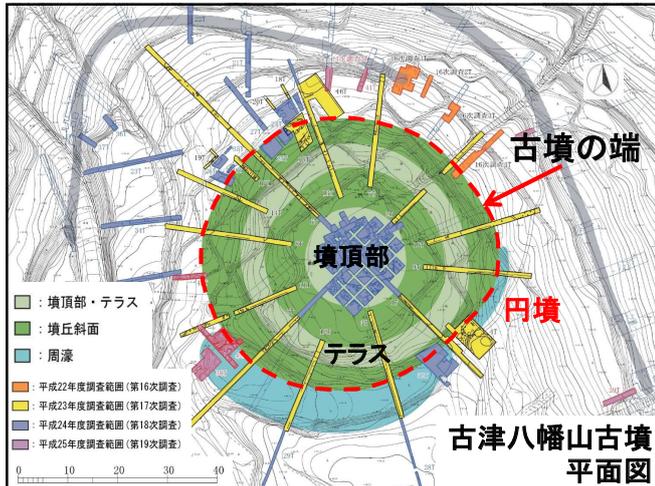
スライド30

②古墳時代 古津八幡山古墳

スライド31



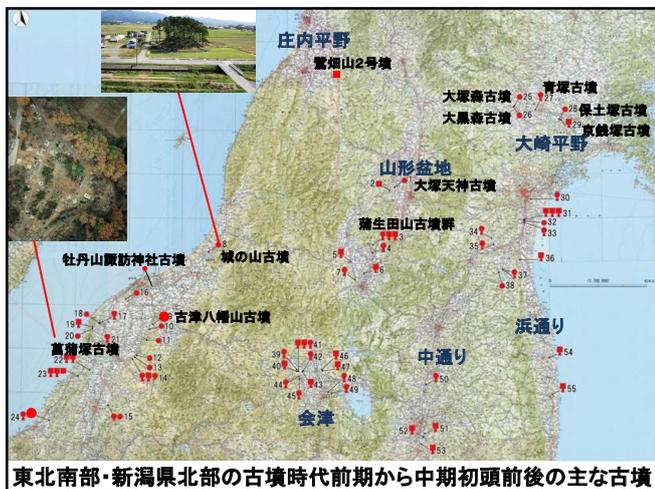
スライド32



スライド33



スライド34



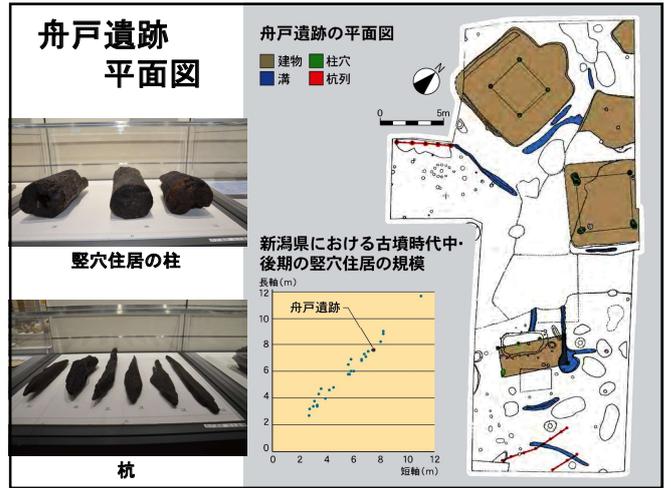
スライド35



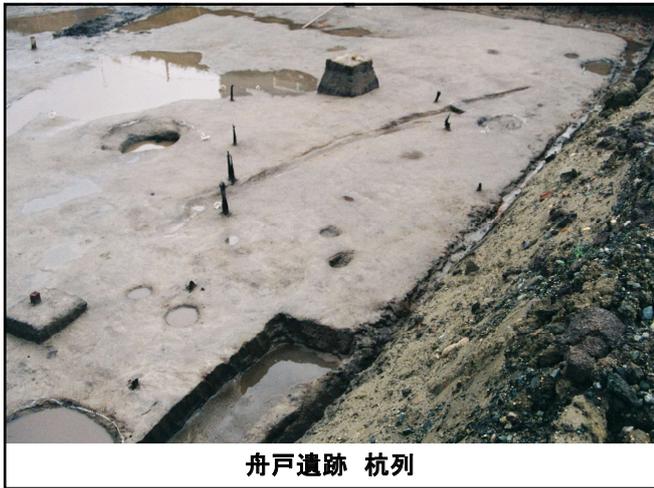
スライド36



スライド37



スライド38



舟戸遺跡 杭列

スライド39

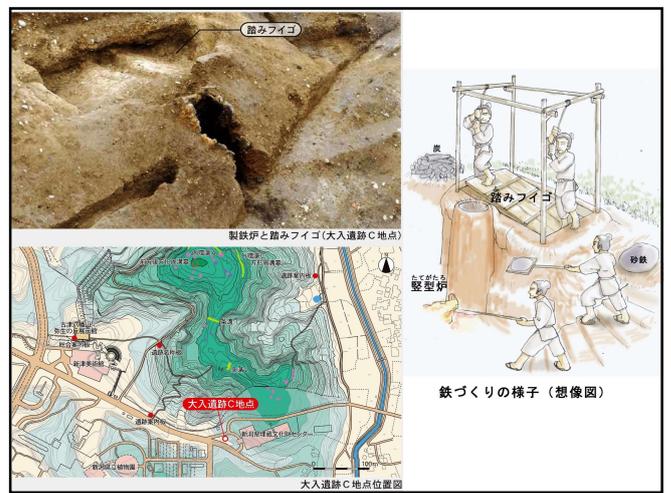


舟戸遺跡 竪穴住居

スライド40

③奈良・平安時代
金津丘陵製鉄遺跡群

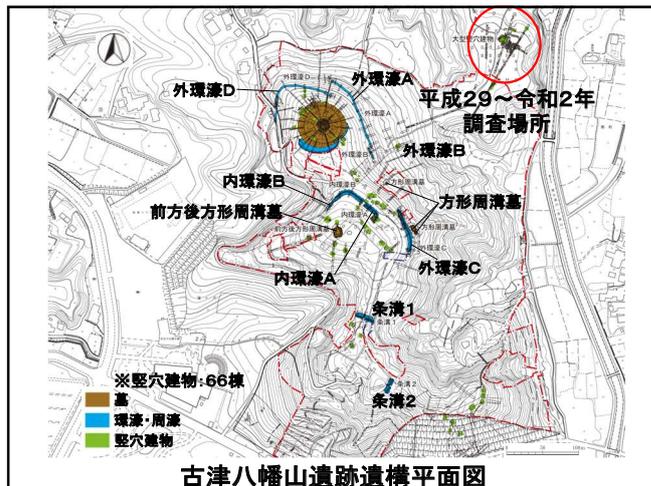
スライド41



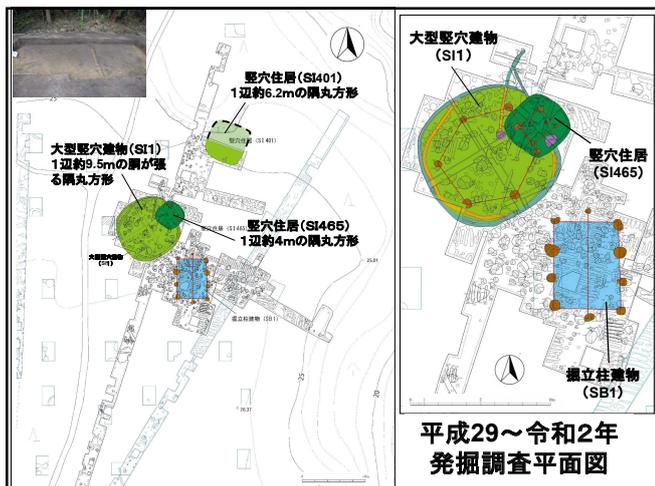
スライド42

3. 最近の調査成果を交えて見た古津八幡山遺跡 (弥生時代)

スライド43



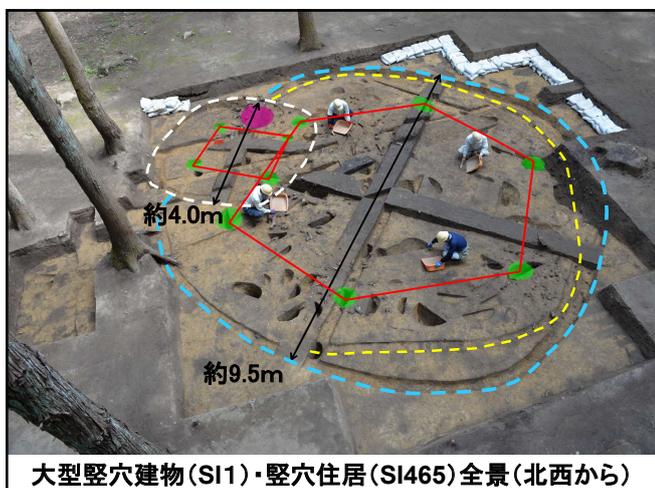
スライド44



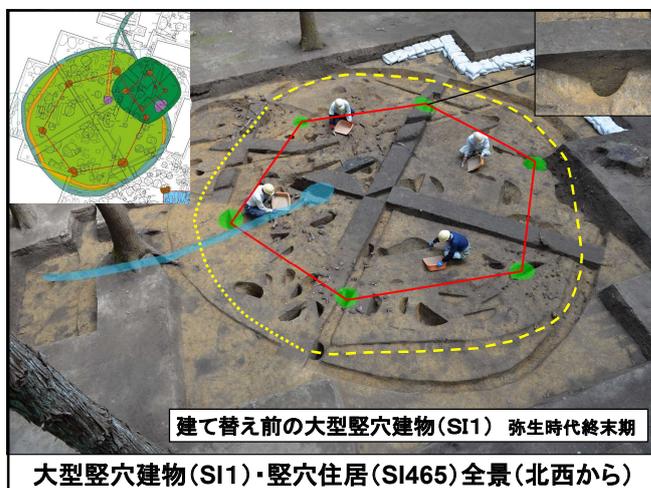
スライド45



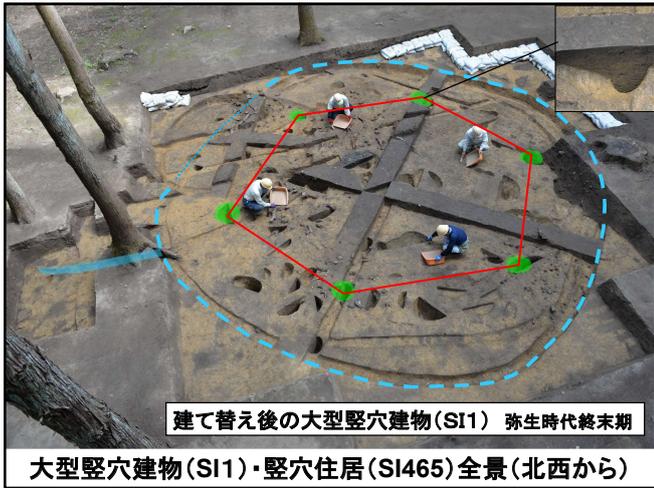
スライド46



スライド47



スライド48



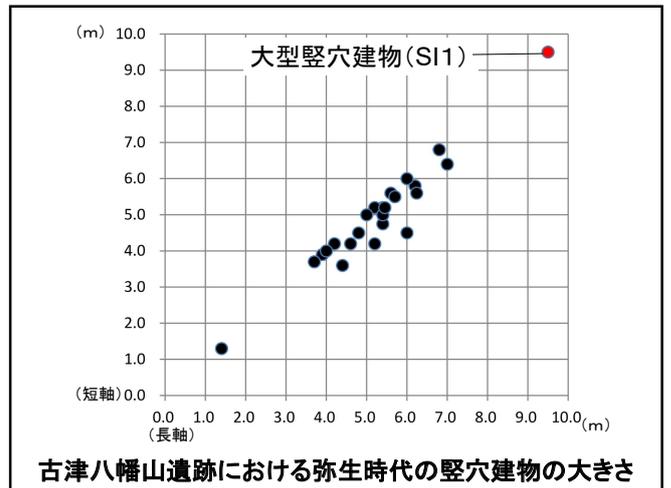
スライド49



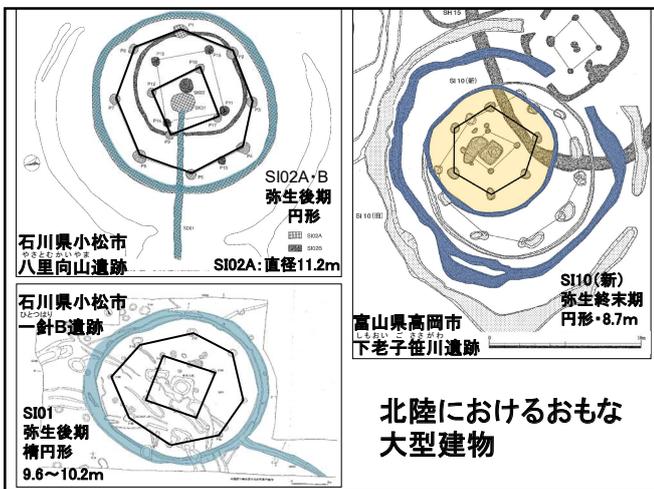
スライド50



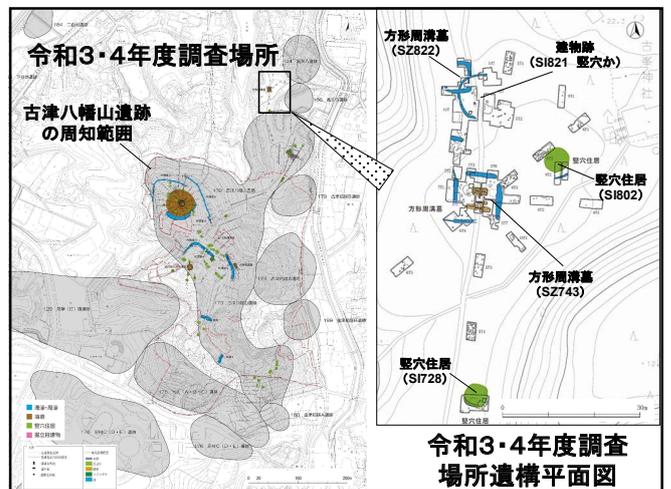
スライド51



スライド52



スライド53



スライド54



スライド55



スライド56



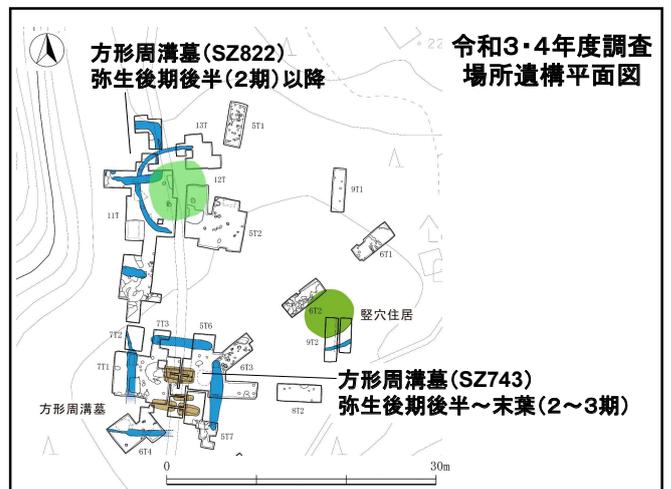
スライド57



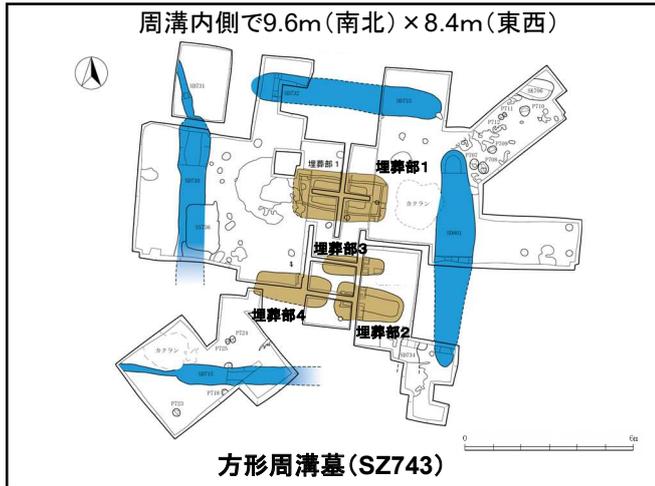
スライド58



スライド59



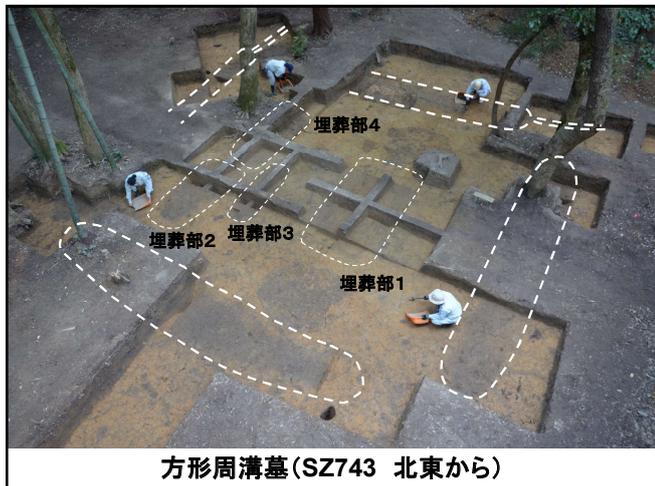
スライド60



スライド61



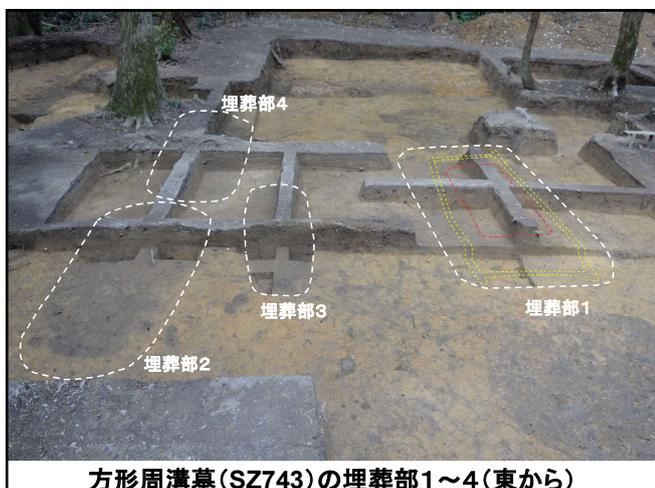
スライド62



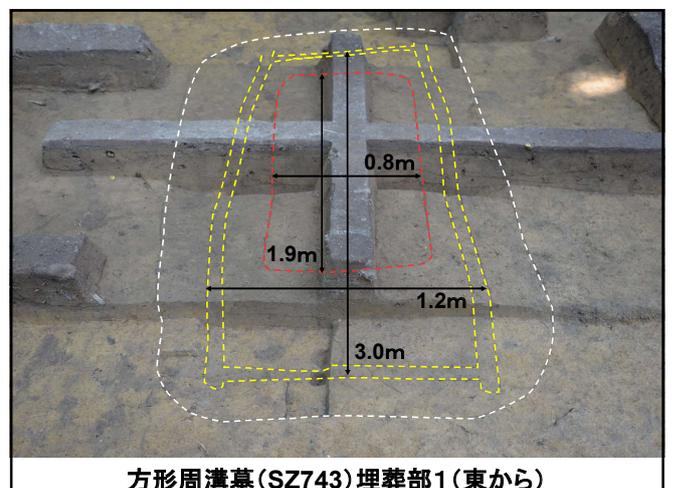
スライド63



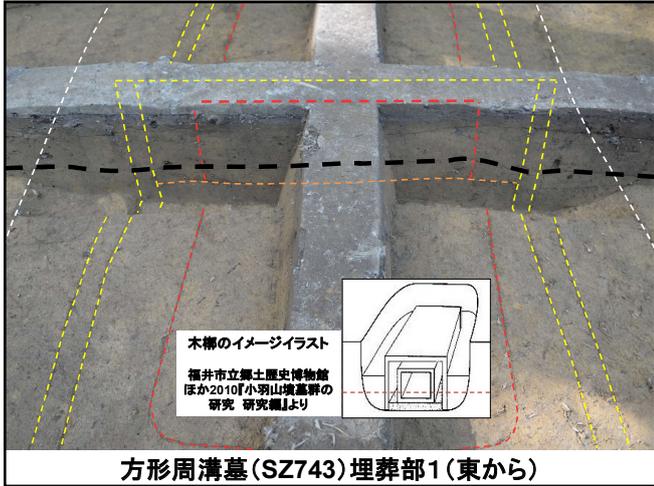
スライド64



スライド65

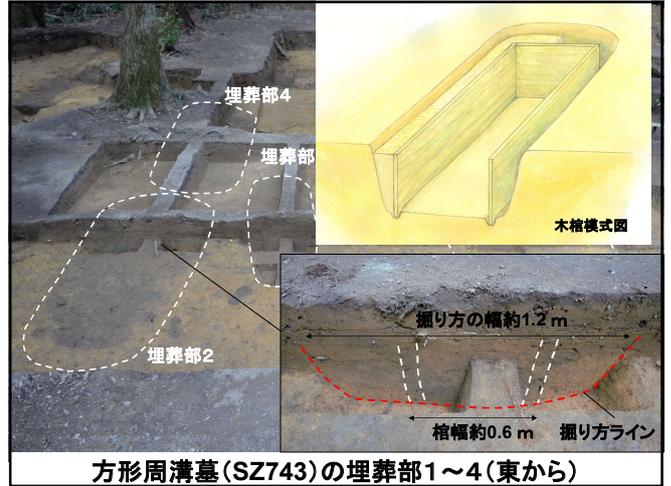


スライド66



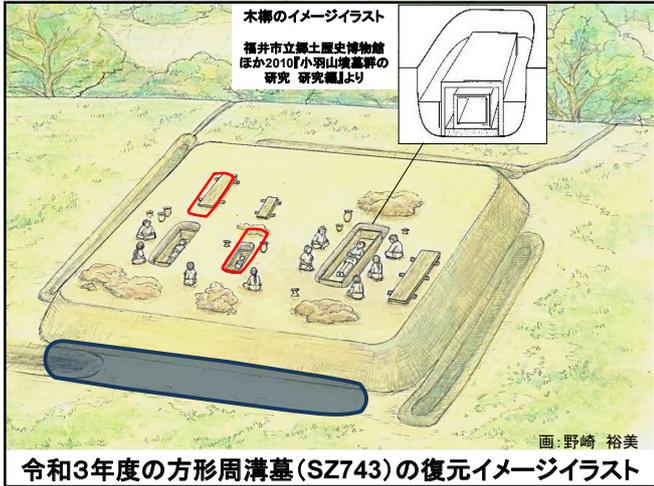
方形周溝墓(SZ743)埋葬部1(東から)

スライド67



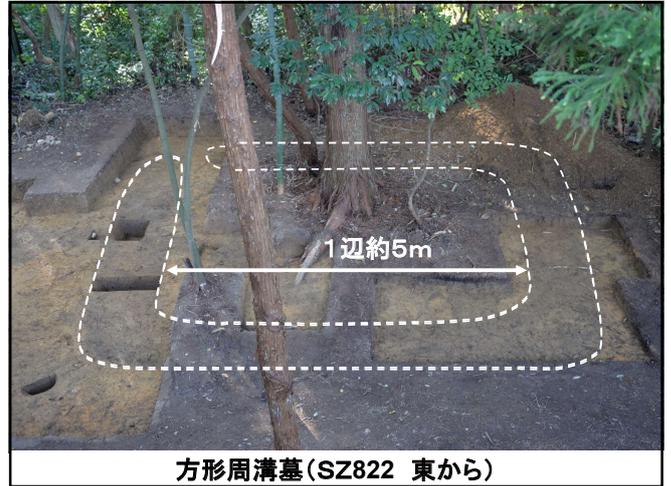
方形周溝墓(SZ743)の埋葬部1~4(東から)

スライド68



令和3年度の方角周溝墓(SZ743)の復元イメージイラスト

スライド69



方形周溝墓(SZ822 東から)

スライド70



スライド71

※白抜きは横穴系の埋葬施設・右数値は規模(m)

時期区分	時期	地域		阿賀北	信濃川 河口付近	信濃川左岸 弥生・ 角田山麓	島崎川・ 西山丘陵周辺	新潟丘陵 (古渡八幡山)
		新潟シンボル年	古墳集成編年					
弥生後期 (弥生終末期)	1							SK1005■3
	2							SK1004■6
	3							SZ743■10
	4							(SZ822 田5)
	5							SK0354■15
	6				正FRC■5			
古墳時代前期	7	1期		二本松 塚山■16				
	8	2期		碓氷山■42	碓立八幡■30			
	9	3期						
	10	4期						
後半		5期		TG232				

新潟県における弥生時代後期～古墳時代の主な墳墓

スライド72



スライド73



スライド74

国内の木柵墓一覧

(岡村孝作2018『古墳時代棺柵構造と系群』同成社をもとに作成・一部追加)

No.	遺跡・遺構	所在地	時期	形状	規模		埋葬部		埋葬部	形状	式	木柵	備		
					長さ	幅	長さ	幅							
1	熊ヶ野2号墳跡1	広島県北広島市	弥生中期後葉	A	2.5	0.8	0.45-0.5	0.7	0.55	0.15-0.2	1.9	【報告式】	2.1	0.45	
2	熊ヶ野1号墳跡5	広島県北広島市	弥生中期後葉?	A	2	0.7-0.75	0.15*	0.2	0.35	0.1	3.8	【報告式】	2		
3	藤原野9号大塚墓	福岡県北九州市	弥生中期後葉~中葉	A	0.45	1.25		0.3	0.48		4.1	【報告式】	2.2*	0.48	
4	江島遺跡S101	福岡県北九州市	弥生中期後葉	A	4.1	1.8		3.4*	1.1		3.1	【報告式】	2.7	0.5-0.6	
5	江島遺跡S1012	福岡県北九州市	弥生中期後葉	A	2.8	1.3		0.7	0.7		2.9	【報告式】	1.9	0.2	
6	桂木北山遺跡S1100	佐賀県佐賀市	弥生中期後葉	A	7.35*	3.7*		0.74-0.8			3.5	【報告式】	2	0.6	
7	増上遺跡S1462	佐賀県佐賀市	弥生中期後葉~中期前半	A	2.45	0.95	0.55	0.2	0.75	0.2	3.8	【報告式】	1.9	0.65	
8	安芸高松遺跡S1462	岡山県岡山市	弥生中期後葉	B	3.95	2.95	0.95*	×	3.2	1.98	×	2	【報告式】	2	
9	古津八幡山遺跡集落跡(外環溝)	新潟県新潟市	弥生後葉後葉~末	B	15.0	1.75		×	3	1.2	2.5	【報告式】	11,905	0.6	
10	岡山遺跡S1462	岡山県岡山市	弥生後葉後葉	B	4	2.5	0.9	0.7	1.4		1.9	【報告式】	1.9	0.55	
11	岡山遺跡S1462	岡山県岡山市	弥生後葉後葉	B	3.3	2.5	1.3	?	0.95	0.2	3.2	【報告式】	1.6	0.45	
12	岡山遺跡S1462	岡山県岡山市	弥生後葉後葉	B	1.1	3.8	0.6*	?	2.5	1.3	0.6	1.9	【報告式】		
13	山形遺跡S1462	山形県山形市	弥生後葉後葉	B				2*	1			【報告式】	1.7*		
14	山形遺跡S1462	山形県山形市	弥生後葉後葉	B				0.7	0.9			【報告式】	1.2	0.8-0.9	
15	山形遺跡S1462	山形県山形市	弥生後葉後葉	B	9	4.55-5.5	2.1	0.4	3.5	1.3-1.6	0.88*	2.3	【報告式】	2.2	0.8-0.9
16	山形遺跡S1462	山形県山形市	弥生後葉後葉	B	4.8	2.4	1.4	×	2.96	1.18	1	2.5	【報告式】	2	0.4-0.55
17	山形遺跡S1462	山形県山形市	弥生後葉後葉	B	5	3.5	1.7-1.7*		3	1.9-1.9*	2.1	2.1	【報告式】	2.2	0.8-0.9
18	山形遺跡S1462	山形県山形市	弥生後葉後葉	B	5.1	4.5-4.5*	1.1*		2.5	1.2-1.25	0.7-0.8	2.1	【報告式】	2.1	0.4-0.5
19	山形遺跡S1462	山形県山形市	弥生後葉後葉	B	6	4.5		×	2.6	1.25	0.8	2.1	【報告式】	1.3	0.8
20	山形遺跡S1462	山形県山形市	弥生後葉後葉	B					2.8	1.55		2			
21	山形遺跡S1462	山形県山形市	弥生後葉後葉	B	10	6.5	2.5	0.4	6.5	2.5-2.7	1.5	2.5	【報告式】	4	0.7-1.2
22	山形遺跡S1462	山形県山形市	弥生後葉後葉	B	18	6		0.4	6.5	2.6	0.8	2.5	【報告式】	5.9	1.3
23	山形遺跡S1462	山形県山形市	弥生後葉後葉	B	2.7	1.9			2	1.4-1.6		0.4	2.6	0.4	
24	山形遺跡S1462	山形県山形市	弥生後葉後葉	B	3.85	1.9	0.94		2.7	1.2	1.2	2.3	【報告式】	2	0.8
25	山形遺跡S1462	山形県山形市	弥生後葉後葉	B	4.5	3	1.3		2.7	1.2	1.2	2.3	【報告式】	2	0.8
26	山形遺跡S1462	山形県山形市	弥生後葉後葉	B	3.65	2.95	1.35	×	3.65	2.95	1.35	1.4	7	0.1	0.8
27	山形遺跡S1462	山形県山形市	弥生後葉後葉	B					5.5	3		1.8	【報告式】	4	1.3
28	山形遺跡S1462	山形県山形市	弥生後葉後葉	B	7.2	4.5	1.1	×	4.7	1.4-1.6	1	2.9	【報告式】	3	0.7
29	山形遺跡S1462	山形県山形市	弥生後葉後葉	B	3.4	2.2	0.9	×	3	1.2		2.3	【報告式】	2	0.8
30	山形遺跡S1462	山形県山形市	弥生後葉後葉	B	4.7	1.3			4.7	1.3	1.5	3.6	【報告式】	2	0.5
31	山形遺跡S1462	山形県山形市	弥生後葉後葉	B	7	1.35			3.5	1.1	1.1	3.2	【報告式】	2	0.5
32	山形遺跡S1462	山形県山形市	弥生後葉後葉	B	3.6	0.5	2.5	×	6.2	1.18-1.21	0.9-0.9	4.5	【報告式】	14.4	0.7-1.1
33	山形遺跡S1462	山形県山形市	弥生後葉後葉	B	5.42	0.8-0.7			2.3	0.9		2.6	【報告式】	2	0.5
34	山形遺跡S1462	山形県山形市	弥生後葉後葉	B	5	1.4-2	1.1	×	3.5	0.7-0.8	0.8*	4.5	【報告式】	3	0.6

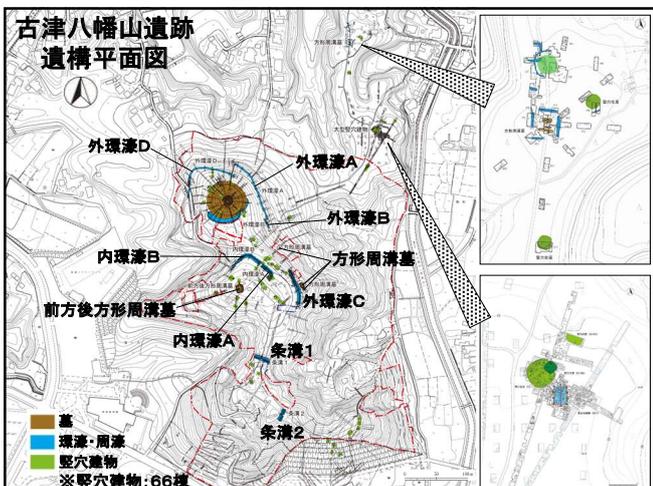
スライド75

古津八幡山遺跡の動向

時代	北陸南西部編年	古墳集大成編年	新潟シンボジウム編年	古津八幡山遺跡			
				環濠	竪穴建物	掘立柱建物	墓
弥生時代中期	小松						
	専光寺						
	戸水口						
	V-1群						
弥生時代後期	V-2群						方形周溝墓
	V-3群						
	2-1群						
	2-2群						
弥生時代終末	3群						
	4群						
	5群						
	6群						
古墳時代前期	7群						
	8群						
	9群						
	10群						

※表字は平成29年以降の調査で見つかった遺構

スライド76



スライド77



スライド78